

台湾韓僑に関する調査、及び「台湾」を巡るコンフリクトの研究

富永悠介（日本学所属）

1：調査趣旨

報告者は、台湾北部の港湾都市である基隆を主な調査地とし、そこに暮らす沖縄・朝鮮出身者の歴史経験に着目しながら研究を進めてきた。平成 22 年度の本プログラム（第一次）の台湾調査（調査研究タイトル：「沖縄／台湾／朝鮮」の「交流史」に向けて——基隆の「水産」を再調査から——）は、史料と聞き取りを中心とする調査を行い、自身の研究を一層発展させていくための足がかりとなった。そして今回（平成 23 年度第一次）は、本研究をより多角的な視点から見つめ直し一段と深みのある研究を目指すために、韓国での調査を行なってきた。

韓国調査の主な目的は次の二点だった。（1）韓国での台湾韓僑研究の状況を把握すること、（2）台湾から韓国に帰還した在台湾朝鮮人（以下、台湾韓僑）及び韓国華僑への聞き取り調査を行うこと。それでは以下、調査概要と結果について述べていきたい。

2：調査概要

2-1：調査期間

2011 年 9 月 8 日～9 月 29 日（韓国）

2-2：主な調査機関及び調査地

- ・ソウル 国会図書館、聖公会大学東アジア研究所
- ・仁川 チャイナタウン、韓国仁川華僑総会

3：調査成果

（1）韓国での台湾韓僑研究

韓国と台湾は、冷戦体制下において防共圏に組み込まれ、冷戦崩壊後の 1992 年まで国交があった。こうした韓台の歴史的関係は台湾韓僑たちの歴史経験を考えるうえで大変重要な意味を持っている。しかし、冷戦期の韓国知識人の関心はもっぱら中国に向いており、韓国のアカデミズムのなかで台湾そのものが研究対象として注目され始めたのはごく最近なのではないかと推測する。

韓国では海外同胞史研究が盛んだという印象を受けた。特に研究雑誌『在外韓国人研究』は海外同胞史研究に大きな影響を与えたと考えられる。また、海外同胞史を牽引してきた主な領域は、日本に暮らす朝鮮・韓国出身者、中国東北地方の朝鮮族だったと推測できる。

台湾韓僑を最初に正面から論じた研究は、2002 年に『国史館叢書』に発表された金泳信「日帝下韓人の臺灣移住」（pp. 189-211）だった。金論文は主に植民地台湾に移住した朝鮮人の渡航背景と航路、人口推移などを概説的に述べ、戦後の台湾韓僑についても僅か

ではあるが言及されている。注目すべきは1928年5月14日、台中を訪問した久邇宮邦彦に短刀を投げつけたとして不敬罪で死刑になった趙明河の記述である。金はこれを「趙明河事件」とするが、報告者の調べによれば「台中事件」「台中不敬事件」とも呼ばれており呼称は統一されていない。

趙明河の研究は、日本や台湾ではまだ発表されていない（現在、報告者は趙明河について別稿を準備したいと考えている）。韓国では例えば、趙垣来「趙明河의 台湾義挙와 意義」（『한국학연구 2』、1992年、pp.135-166）がある。金論文よりも約十年早く発表されたことは注目されていだろう。また、趙明河は台湾韓僑を代表する抗日英雄として、1978年に台北韓僑小学校に銅像が建立されている。

台湾韓僑研究は以上のような研究を嚆矢としながら、2003年に『한인귀환과 정책』が刊行された。これは中国・日本・台湾に暮らす朝鮮半島出身者に関連する史料を収録した史料集で全10巻の構成である。そのうち、台湾韓僑に関するものは第9～10巻、日本は第1～2巻、そして第3～8巻が中国となっている。学術論文としては、黄善翌の「해방 후 대만지역 한인사회와 귀환」（『한국근현대사연구』第34号、2005年、pp.194-220）、「해방 후 대만한교협회 설립과 한인의 미귀환」（『前掲書』第38号、2006年、pp.134-159）が発表され、台湾韓僑の帰還と未帰還に焦点を絞り論じている。これらの他にも、孫炳華「台湾韓僑初等学校教育課程改善研究」（全南大学教育大学院修士論文、1997年）などがある。

以上のように、日本や台湾での台湾韓僑研究に比べれば研究成果は多々ある。しかし、韓国における海外同胞史から見ればようやく研究が着手された段階にあると言えよう。

(2) 聞き取り調査

韓国調査の前に台湾でも調査を行っていた。この時、台湾韓僑の方々へに帰還された人々の連絡先を伺ったが、帰還後は連絡を取り合っていないので分からないとの返答を得た。また、韓国仁川華僑総会を訪れ、台湾から帰還した台湾韓僑について話を聞いたが、仁川に暮らすのは中国華僑がほとんどで、台湾からの華僑、或いは、海外同胞が仁川に職住を求めてやって来たという話は聞いたことがないと教えて頂いた。

4: 今後の課題

今回の調査は、これまで取り組んできた自身の研究を改めて位置づけ直すための、予備調査だった。今後の課題としては、韓国で収集できた史料（主に学術論文）からさらに調査を進めていくこと、また、中国朝鮮族の歴史や生活にも視野を広げながら台湾韓僑たちの歴史経験に身を寄せていくことが挙げられる。聞き取り調査に関して言えば、今回は具体的な成果を得ることができなかった。台湾を中心に様々な地域に足を運びながら、少しずつ話を伺うことが出来たらと思う。